

不妊・去勢手術の徹底

譲渡された子犬や子猫には、不妊去勢手術を徹底しましょう。

譲渡先の家庭で繁殖し、また飼いきれなくなったと言って行政に引取られるようなことになれば本末転倒です。譲渡数を増やすことは大事ですが、同時に行政に引取られる子犬や子猫の数を減らさなければ、せっかくの譲渡の努力が報われません。

不妊去勢手術の徹底は、簡単なテーマではありませんが、各自治体が行っている事例などを紹介します。ぜひ参考にしてください。

①飼い主への指導と追跡調査で実施率アップ

譲渡された動物には早期に不妊去勢手術をうけさせることを、ほぼすべての自治体が新しい飼い主に依頼しています。事前講習会で説明し、譲渡の際の誓約書にも書かれていますが、実態としては、すべての飼い主が実施しているわけではありません。これを徹底してもらうには、「効果的に不妊去勢の意義とメリットを伝える」そして「実施の確認をする」の2点に気をつけましょう。

■効果的に不妊去勢手術の意義とメリットを伝える

事前講習会では、「これ以上不幸な命を増やさないために」という一般的な意義の説明のほかに、飼い主が興味を持つように、動物の健康や飼いやすさという点から話をするといいいようです。以下の表は、不妊去勢手術のメリット・デメリットを一覧にしたものです。

こうした表を見せながら説明するのもいいでしょう。



	オス（去勢手術）	メス（不妊手術）
メリット	●前立腺の病気、精巣や肛門周辺の腫瘍などの予防になる ●性的欲求によるストレスから解放される ●マーキング、マウンティング、ほかのオスへの攻撃性が軽減される（猫の場合、スプレー行動も軽減）	●望まない妊娠が避けられる ●子宮の病気や乳がんの予防になる ●生理や発情期のわずらわしさとともに、発情のストレスがなくなる
	●ストレスと多くの病気が軽減されることにより、健康に長生きできる確率が高くなる ●社会全体として、不幸な動物を減らすことができ、遺伝性疾患の軽減にも役立つ ●発情期のストレスや、発情に関連した問題行動が減少することによって、外出の制約がなくなる。周囲への迷惑も軽減できる	
デメリット	●肥満になりがち これは体質の変化ではなく、発情や性衝動に関するストレスがなくなることで、基礎的な消費カロリーが減るため。場合によっては、食餌量を減らしたり、カロリーの低いフードに変える必要がある。ただし、成犬・成猫になると、手術の有無にかかわらず運動量が減り、肥満傾向が出てくるので、日ごろからバランスのいい食餌と、適度な運動は必要。	

■実施の確認をする

譲渡後に不妊去勢手術が実施されたことを、報告書として提出するよう、新しい飼い主に要請している自治体も多くあります。報告の内容は「不妊去勢手術を実施した日付、病院名、譲渡後の飼養状況」などが基本で

★譲渡時に、往復はがきや切手付きの封書もつけて、返信をお願いする

★譲渡後一定期間（1ヶ月後、3ヶ月後、6ヶ月後など）に、はがきなどで報告を求める

★報告がない場合、報告の内容に不審な点がある場合、電話や訪問などで確認、再度指導、といった方法がとられています。

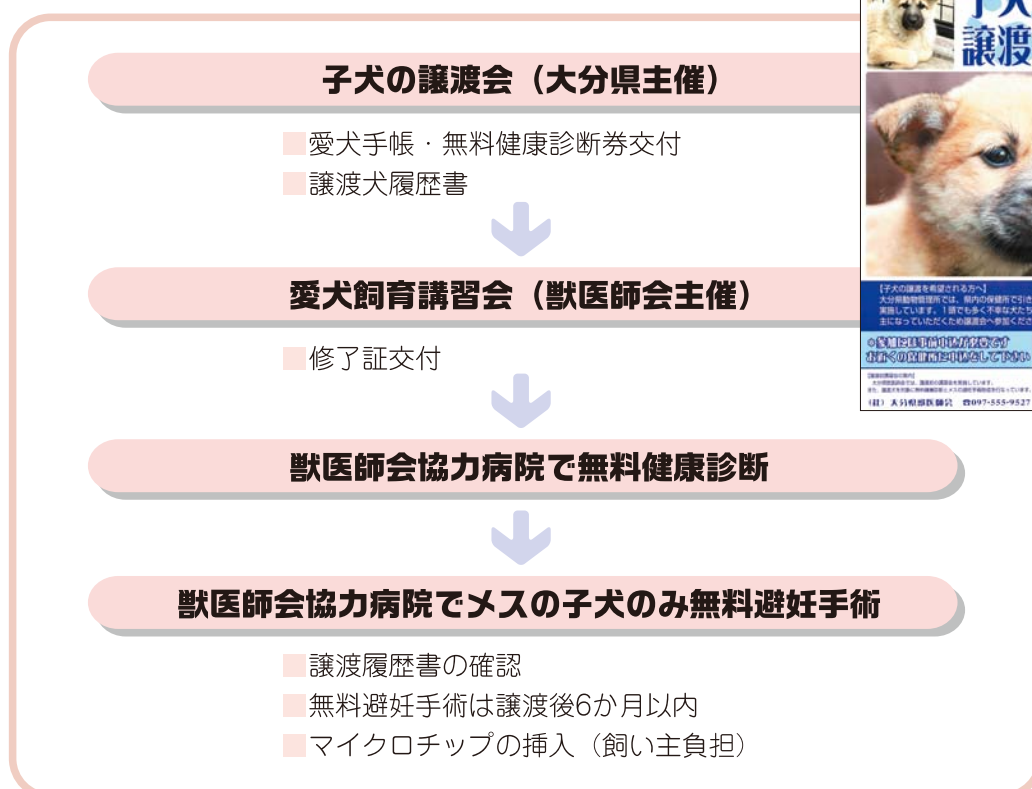


ちなみに、和歌山県動物愛護センターでは、平成17年度から不妊去勢手術の実施状況報告の提出を始めたことによって、実施率が前年度に比べて15%上昇したという例があり、報告書の提出を求めることが非常に有効であることがわかります。

② 獣医師会との連携で無料不妊手術を実施

大分県では、（社）大分県獣医師会およびボランティアとの協働事業として、平成19年度から、県が譲渡したメスの子犬の無料避妊手術が行われています。

メスの子犬の避妊手術にかかわる経費の負担および実施を100%獣医師会の負担で行うという画期的な事業であり、以下のような流れで実施されています。



この事業がスタートしたことによって、不妊去勢手術を実施する飼い主が増え、また手術料の負担からメス犬の譲渡希望者が少なかった実情が改善されています。さらに、この事業がマスコミなどで大きく報道されたことにより、県が子犬の譲渡を行っているということが広報され、譲渡希望者も大きく増加。一般への不妊去勢手術の普及にもなっています。獣医師会との連携を行うことで、より適正な譲渡事業が進められている好例です。

③ 団体譲渡では手術実施率100%

民間団体・ボランティアなどを通して、個人家庭に譲渡する「団体譲渡」（自治体によって、ボランティア譲渡などとよばれることもあります）の場合、不妊去勢手術の実施率が、100%となります。

これは、個人家庭に譲渡する前に、団体（ボランティア）が不妊去勢手術を行うためで、東京都が平成18年に行った「譲渡犬の追跡調査」によると、団体から譲渡された犬の場合は、不妊手術の実施率が100%。去勢手術は93.8%（一匹のみ譲渡された犬が高齢であったため、獣医師の判断で手術を見合わせた）となっています。これにくらべて、行政から個人に対して行った一般譲渡では、不妊手術が71%、去勢手術が50%にとどまっています。



Column

成犬のすすめ

「子犬のときから飼わないと懐かないのではないか」と思いこんでいる人は多くいますが、決してそんなことはありません。譲渡希望者の飼育環境やライフスタイルを聞き取ると、子犬よりも成犬のほうが向いている場合もあります。健康チェックや性格チェックが済み、譲渡に適していると判断された成犬が施設にいる場合には、ぜひ、成犬譲渡も薦めてみましょう。

特に子犬より成犬が向いている譲渡先

- ・留守が多い家庭
（一人暮らしや夫婦共働きなど）
- ・高齢者だけの家庭
- ・最初から外飼いを希望する家庭

成犬の長所

- ・子犬ほど手間がかからない
- ・すでに性格がわかっている
- ・すでに体のサイズがわかっている



なお、成猫の場合は、成犬よりも譲渡希望者が少ないのが現状ですが、適性のある成猫がいれば勧めてみるのもいいでしょう。成犬の場合と同様、子猫ほど手間がかからず、性格も分かっているの
で飼いやすいという長所があります。

④譲渡前の不妊去勢手術

長野県動物愛護センター（ハローアニマル）では、平成12年4月のオープン以来、県下の保健所から引き継がれた譲渡候補の犬猫（成犬・成猫も含む）すべてに、センター内の医療室において不妊去勢手術を行い、その後、一般家庭に譲渡しています。譲渡前に手術を行うことで、譲渡された動物が出産して不幸な命がまた行政に引取られるという悪循環を完全に断ち切ることができます。ハローアニマルでは、以下のような点に注意して実施しています。



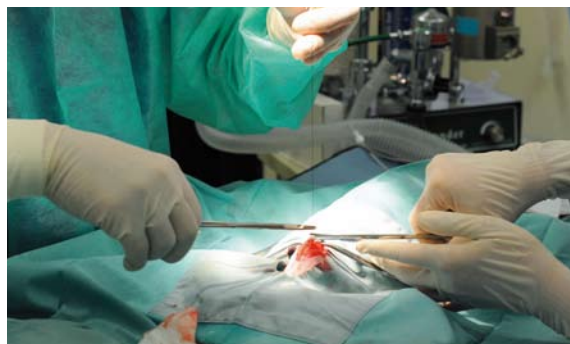
■手術実施時期について

収容されてからの健康状態を観察し、適切な時期に手術を行っています。月齢よりも体重を基準にしており、子犬は3キロ、子猫は1キロ以上を目安に実施、オスの場合は、精巣が陰嚢に下垂してからの手術になります。また、小型犬や体重増加が少ない個体の場合にはセンター搬入後約2ヶ月間の観察後に実施しています。



■早期不妊去勢手術について

一般に、生後6～16週齢のうちに不妊去勢手術を施すことを「早期不妊去勢手術」と言います。手術は、通常の不妊去勢手術同様、オスの場合は睪丸摘出、メスの場合は卵巢子宮摘出となります。こうした早期の手術の場合、傷口が最小限で済むなど体力的な負担が少なく、また、実際にハローアニマルで手術を行っている獣医師の報告によれば、早期のほうが手術に対してのストレスが少ない印象を受けるとのこと。手術を実施し、麻酔からの覚醒後、2～3時間で尾を振ってじゃれついてくるとのことです。



また、適切な知識と技術のある獣医師であれば通常の不妊去勢手術よりも短時間で行うことができるとされていますが、ハローアニマルでは、麻酔前に鎮静や鎮痛の目的で使用する医薬品の副作用(呼吸抑制作用)を考慮し、特に、吸入麻酔時の呼吸管理を徹底して実施しています。かつて、幼齢な動物に対する不妊去勢手術には、泌尿器系の疾患、発育不全などが懸念されていましたが、現在は獣医学的に否定されているので安心して実施しているということです。



長野県では、こうした不妊去勢手術、さらに譲渡後の飼い主への指導・助言、地道な啓発活動などもあって、飼い主の意識も向上し、平成19年度の長野県の犬の引取り数は484頭で、全国的に見ても非常に少なく、平成17年度の調査によると、保護・引取り犬に対する譲渡率は36.8%で、全国1位となっています。